



TITLE:

倉敷天文臺通信

AUTHOR(S):

荒木, 健兒

CITATION:

荒木, 健兒. 倉敷天文臺通信. 天界 1934, 14(159): 345-345

ISSUE DATE:

1934-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165548>

RIGHT:

倉敷天文臺通信

四月下旬のある日、朝からの怪しい空が午後早く美しく晴れたので、大いそぎで観測室の屋根を開き、大反射鏡をグルツと廻したところ、極軸の周圍に組んである杵と望遠鏡との間に、不覺にも、左の拇指を挟み、作業手袋を紅に染めたものである。ハンケチを千切つて假纏帶の後、観測は完成したし、幸に骨は傷けなかつたが、望遠鏡をふりまはすのが少し恐ろしくなつた。

四月30日、月曜、六高在學中の高田君は、授業を終へて後、わざわざ鏡面鍍銀のため來訪された。宿舍の土間を臨時實驗室として、大きい鏡を下向にして鍍銀した。同君は理論化學を志望して居られるだけあつて、實に堂に入つた作業振りは全く研究的で、私はヘマをやらかしては度々叱られたものである。豫定の通り美事に鍍銀を終り、夜は晴れ渡つた空に諸天體の麗姿に親しんだ。『新しい鏡面ではオリオン星雲の形が大きく見える』と岡山の内藤君がムキになつて居られたことがあるが、外部の淡い光の方まで見えるからである。

イギリスから渡來した平面鏡がよくないとて、岡山の坂本先生が一枚磨いて下さつた。今はこれを使つてゐるが、條件は頗るよく、『獵犬の渦巻星雲の形が寫眞のやうに見える』と聞いたら、美ましがる人が多いことであらう。

五月9日の朝、後月郡の三宅君が來られた時は、たまたま參觀者があつたが、同君が月の表面のことを説明されたので、よほど天文をよく知つてゐると感心してゐた由。

翌10日の午後おそく、香川縣の森安君が突然來訪された。時間が少なかつたが、内容充實した話は驛頭までつづき、上り列車に御送りした。大阪への御用件の途上を立寄られたのである。

20日の午後、雨の中を、神戸の荻部氏來訪された。快晴であれば夜空に星を追ひ、凹面鏡の非凡さを激賞していただける筈であつたが、残念ながら會談一時間、星の友數氏へ寄せ書。(五月28日 荒木健兒)